

社会福祉学会は資格や専門職養成にどのように関与するか？

今期は、上記テーマで 5 名の会員にお集まりいただき実施した座談会を 5 回に分けて連載します。座談会は、上記テーマについて学会における議論を拓くことを目指し、ざっくばらんに話すことを趣旨としています。明確な結論を出すようなものではありません。会員間、学会のなかで議論を深める一助になればと願っております。

第 1 回、第 2 回からの議論の続きになりますので、ご関心をもたれた会員の皆様には、過去号もご参照いただければ幸いです。

座談会にお集まりいただいたメンバーと、当日参加した広報員のメンバーは下記のとおりです。お忙しいなか、ご快諾、ご参加くださった会員の先生方に心よりお礼申し上げます。

登壇者：石川時子会員（関東学院大学）、口村淳会員（岡山県立大学）、菱沼幹男会員（日本社会事業大学）、三輪清子会員（明治学院大学）、渡辺裕一会員（武蔵野大学）

司会・広報委員会：岩永理恵（日本女子大学）、有村大士（日本社会事業大学）、任セア（立教大学）、大澤朋子（実践女子大学）、片山寛信（北海道医療大学）

第 3 回：社会福祉士の新カリキュラムが大学・教育に与えた影響など

石川：渡辺先生のお話聞いてて、そうだろうなっていうふうに思いました。私自身が経験した大学は、学部の中に社会学とか、資格を取らない選択がある大学ばかりです。社会福祉士を志望する学生だけが科目数が多くなる。卒業単位は余裕で得られるはずの大学なのに、資格を取る人だけ実習に行かなきゃいけない、演習も大変厳しいっていうふうになるので、途中で諦めたくなるっていう選択肢がくるんですね。大学によっては卒業を優先するために資格はすごく頭のいい子や、頑張り屋さんだけがやるものになる。他方で、ある程度レベルの高い大学だと、今度は社会福祉士を取ったとしても、そんなに職業としての条件がよくないのが見えているので、就活情勢を見て資格を取らない選択肢がある。学力の大変さがある人は実習、演習でこんな日誌とか書いたりするのが大変なので諦めてしまいます。今いる大学では、どうやって演習を続けさせるか、記録を書かせるか、実習に送り込んでマナーが守れるかみたいな、そういったところで、困難を感じることは多々あります。実習時間が延びたことによって、底上げをするっていうことが、今、大変なところなんだろうなと思っております。

また、社会福祉士が必須でない大学を自分も経験ずっとしてきていると、資格の養成校にだけな

ってしまうっていうのは、どうなんだろうなって私自身はずっと思っています。教養とか、社会学をベースにした学問の面白さみたいなのを自分は大事にしてきているので、最後、卒論はどうでもいいから資格の勉強をするっていう雰囲気になっちゃうっていうことは、私は反対派で学問を最後までやって卒業させたいって思ったりする。この先々、社会福祉学をベースにしている人間と社会福祉士の養成の教員としてという立場を、考えていくんだろうな、と思います。養成校の教員なのか、研究者とか、教育者としての割合をどのように持つのだろうかっていうのは、最初に言った話と結びつくんですけど、大学のあり方ではなかなか難しい意見の相違があるんだろうなと思ってます。

渡辺: 石川先生のご発言が重要と思いました。社会福祉士の国家資格がまるで教育の全てかのように語られること自体に、ものすごい違和感があります。武蔵野大学の社会福祉学科の場合は、1学年145人の定員で、実習に行くのは110~120人です。それはもう本当に私たちが教育の中で目指しているディプロマ・ポリシーの一部です。もちろん、ソーシャルワーク専門職としてのトレーニングをしているので、それが100%社会福祉士と重なっているかということ、社会福祉士はソーシャルワーク専門職の国家資格なんですけど、石川先生がおっしゃったような教養とか学問、社会学とか、そういった学問っていうのは、本当にソーシャルワークの土台になる部分で、絶対切り離せないところだと思うんですね。その教育をなくして、たぶんソーシャルワーク専門職の教育ってないと思うので、それはカリキュラムの中にある指定科目のことを指すのではなくて、もっと広い意味での教養です。そういったものが大学ではしっかりできる、私たちの学科でやっていなくてもできるというところが、まず強みなのかなと思っています。

武蔵野大学は、いつも私たち自分たちで言うんですけど、ちょうどいい大学だと思っています。偏差値でいうと高い方ではないので、とにかく入ってきた人たちの力、一人一人が持っている学力では計れないような部分も含めて、どうやって専門職として養成していくかっていうことは、非常に大きな課題として考え、取り組んでいます。そういう中でもリベラルアーツに関しては非常に重要です。武蔵野大学の学生のほとんどが卒論を書きます。教員も研究の大事さを強調しながら学生たちにも教育をやっています。これらが将来実践をしていく上で、エビデンスベースで、そういったマインドを持った学生をきちんと社会福祉の現場ないし、ソーシャルワークの現場に送り出していくということにつながっているのかな、というふうに思います。途中で諦める人も確かにいたりはするかもしれませんが、優秀な人がやることという捉え方にはなっていません。ただ、それぞれちょっと養成校の条件が違うんだなということも、今、教えていただいたところです。

菱沼: 今のところでいうと、うちの大学は全員が社会福祉士を取るということ、あと卒論も必修なので、そこで課題になっているのは、実習をクリアできないと卒業できないということから、やっぱり何人かは退学にいたってしまう。休学から退学になってしまうということがあるので、必修を外すかどうかについては、ずっと前から議論があるところなんです。学生自身がいろんな生きづらさを抱えながら福祉の仕事を目指していることも多いので、現在は、受け入れ先にもかなりの協力をしていただいています。専門職養成といっても、以前とは違ったところで、多くのサポートを必要とする学生たちが増えてきているなというところがあります。また、今の話でいくと、リベラルアーツはとても重要だと思っていて、卒業時アンケート、他の大学でもやっていらっしゃるかと思うんですけども、そこで明らかなのは、教養科目に対する関心の低さなんです。専門科目については理解が深まったという結果が出てきますが、どうしても教養科目についての関心や理解が弱くなってしまっており、これは大学のFDでも取り上げたいと思っています。今できることとして本学の有村先生とか、私とかは、

かなり授業の中で本を紹介することが多いんですね。とにかく本を読む楽しさみたいなこと、卒業研究においてもわくわくするテーマを見つけることをずいぶん言うんですね。知的好奇心をいかに育てていけるかということを意識してやっています。専門職養成におけるリベラルアーツの重要性や位置づけをどうするのかということは、一つの大事な論点であると思ってうかがっていたところです。

三輪: 石川先生におっしゃっていただいたこと、本当にそうだなというのは、私もずっと感じています。また、菱沼先生がおっしゃったように、多くのサポートを必要とする学生が多くなってきているということも感じています。私が勤務している大学でいうと、毎年3~4割ぐらいですかね。80 名前後が社会福祉士などを目指すという形になります。履修科目もきっちりやらねばという意味で、しっかり履修する学生が、社会福祉士を目指すと思っています。ただ、子どもの福祉に関心をもつ学生の中には、学生自身のライフヒストリーを振り返ると、さまざまな葛藤を家族に対して抱えてきた学生が多くなっているということも、直感的には感じています。明治学院大学も、社会福祉士を養成していくにしても学問的な部分は大事にしていきたいよねというところが、かなりあります。社会福祉士養成へ進む子は全員卒論を義務付けられています。根幹となることや、考え方というところは、大学の教育の中でやろうというところはあるとは思っています。ただ、社会福祉士という資格そのものが、持っていることで、非常にメリットが大きいというわけでもない資格なのかなという面もあって、どのように学生のモチベーションを維持して高めていくかというのも、難しいところだなと思っています。もちろん、資格がなければ就職できないところもありますけれども、子ども分野で児童相談所を目指す学生は、つまり公務員に関しては、社会福祉士の資格が必須ではないですし、児童養護施設も社会福祉士を持っていなくても就職できます。

口村: 私は、新カリの議論が終わってから赴任しましたので、その辺のいきさつはわかりません。まず一つ、渡辺先生がおっしゃいました実習2か所の件に関しては、本学も新カリ以前から、180 時間を予備実習と本実習というように2つに分けてやっていたので、そこに関しては同じ意見です。また、岩永先生がおっしゃるように社会福祉士実習の時間の増えた影響からか、精神保健福祉士をダブルで取る学生が減少傾向にあるようです。その意味では、社会福祉士の専任教員に負担がかかってきています。もう一つは、石川先生のおっしゃるように私自身もリベラルアーツの重要性は理解していますが、たとえば中国、四国地方で考えたときに、大都市部と違って、福祉業界は就職先として結構な比重があるように思います。大都市部みたいに就職先が選べるような状況ではなくて、福祉・医療分野は就職先としての比重が大きいのは確かです。そのため、資格を持って、そこに就職するというのは、暗黙の了解になっていると思います。少子化が大都市部に比べて顕著ですので、大学の存続自体が危ぶまれていると思います。そうなってくると、学生としては国家試験の合格率が高い大学を選ぶのではないかと考えています。リベラルアーツが大切なのはわかりますが、おそらく地方部で、そして就職先として福祉が当たり前のようになっている中、その地域に根差した養成校としては、国家試験の合格率の高さ、それを支える受験対策が、結構な比重を占めているのではないかと、私は考察しております。